

論文の内容の要旨

農学国際専攻

平成 26 年度博士課程進学

氏名 藤原 江美子

指導教員名 露木 聡

論文題目 ボルネオの開発過程における社会階層の動態
－ムダン人コミュニティのリーダーシップ論－

1. 背景・課題

天然ガス、石炭、木材といった豊富な天然資源を有し、広大な森林地帯に覆われたボルネオは、1970年代以降、近代化やグローバル化の流れのなかで経済発展を目指す国家の天然資源開発政策や移住政策の対象地とされてきた (Cooke 2006, King 1993, 森下 2015)。それにより、移住者の流入や企業・移住者と先住者との慣習的な土地所有権の競合という現象が引き起こされ、先住民ダヤック社会における人々と土地との関係は大きな変化の局面に晒されている (河合 2011, Semedi and Bakker 2014)。インドネシア側における 1998 年以降の民主化・地方分権化が進むなかでの開発過程では、アダット (慣習) 復興とともに高まったダヤック社会を含む人々の土地所有権に対する権利追求の動きを解明するために、コミュニティリーダーによるコミュニティ外部への対応の実態が検討されてきた (増田 2012, Bakker 2009, Erb 2007, Li 2007, Urano 2010)。しかし、外部への政治的対応とともにリーダーの役割として重要であるコミュニティ内部の統治能力については十分に検討されていない。開発に直面したコミュニティの変容を理解するには、開発からの利得がリーダーによってどのように調整されるのかをコミュニティ内部の社会関係や社会構造を踏まえて検討する必要がある (海田 2000, 北原 1996;2006)。本研究の課題は、アブラヤシ農園開発の到来により引き起こされた先住者と企業・自発的移住者たちとの土地をめぐる軋轢に対し、リーダーがコミュニティ内外に対してとった対応を明らかにすることである。

2. 分析視点：リーダーシップへの着目

開発に直面した伝統的な社会について検討するとき、開発の人類学研究では、リーダーシップ制社会として知られるメラネシアにおけるリーダーシップ論の事例から、リーダーのリーダーシップと開発との関係はコミュニティ内部の統治を大きく左右することが指摘されている（関根 2001）。ボルネオにはリーダーシップ制と身分制の双方の社会が存在するが、身分制社会における開発とリーダーシップとの関係は明らかにされていない。そのため本研究では、東南アジアの伝統的な農村社会の組織原理の一つである、他者からの承認を重視するリーダーシップ概念（前田 1991）を援用して伝統的に身分制の社会階層が築かれるムダン人社会のリーダーシップを検討する。リーダーと長老たちの合議という複数のリーダーシップの発現を想定した紛争処理への対応を民族誌的に描くことで分析した。

3. 対象地概要・調査方法

対象とするムダン人コミュニティは、元々中央ボルネオに居住していたが、東カリマンタン東クタイ県のクリンジャウ川沿いに 18 世紀後半から住み着き、慣習的テリトリーを主張してきたアダットコミュニティである。2006 年からアブラヤシ農園開発の導入を全面的に拒否してきたこのコミュニティの対応のプロセスを追うことで、開発到来時からの影響を観察した。調査期間は 2009 年から 2019 年の間に同コミュニティに延べ 19 ヶ月間滞在して調査したほか、都市部サマリダ市に滞在し、官公庁、NGO スタッフ、およびサマリダ市に住むムダン人らに対して調査を行なった。調査方法は参与観察とインタビューを中心に行なった。また、2013 年にはロング・ブントック行政村のムダン人コミュニティ住民に対して半構造的質問票を用いた悉皆調査（84 世帯）、2017 年には同様の質問票を用いた悉皆調査をロング・ブントック行政村住民全 252 世帯中 194 世帯に対して行った。

4. 調査結果

コミュニティ外部に対するリーダーシップ① 多民族地域社会の中で：ムダン人コミュニティが置かれている企業や自発的移住者という「侵入者」との土地をめぐる軋轢がみられる地域社会の実態を自発的移住者との関係を中心に詳述した。ムダン人は、これまで自発的移住者を積極的に慣習地に受け入れ、ともに生活圏を築いてきたが、土地所有権については一部の移住者たちを「侵入者」とみなし、その排除を求めている。しかしながら、土地利用方法の違いや移住者らのアダットへの不理解、土地所有権の正当性の競合などによりリーダーたちの対応はあまり進んでおらず、侵入者との軋轢解消は長引いていた。そのため、これまで反対していたアブラヤシ農園開発企業を慣習地に受け入れることを移住者排除の根拠にしようとする住民も現れた。

コミュニティ外部に対するリーダーシップ②アブラヤシ農園開発企業：ムダン人のアブラヤシ農園開発企業を排除する具体的な対策としてコミュニティ林制度への登録活動を NGO アクターとの協働で実施した実態を描いた。地域社会が求める土地利用権の法的認知が困難であること、そしてリーダーたちが NGO 支援者と協働しつつ依存している状況を明らかにした。

コミュニティ内部におけるリーダーシップ：上で述べた外部への対応の結果、コミュニティ内部に生じた軋轢の実態を、コミュニティで初めてのアダット長の直接選挙の企てとその実施がなされた経緯、およびその

後の新アダット長と土地紛争処理の進捗具合に着目して説明した。特権的リーダーによる対応を待つのではなく、コミュニティメンバーたちが紛争処理のために解決策を求めたことを明らかにした。

5. 考察・結論

ムダン人コミュニティの前アダット長や新アダット長を中心とする慣習的リーダーたちのリーダーシップは、①多民族地域社会の中において、そして②アブラヤン農園開発企業との土地の軋轢への対応において脆弱であり、また③コミュニティ内部の軋轢解消に対しても脆弱であることが明らかになった。先行研究で報告されてきたようなコミュニティ内外におけるリーダーたちの特権的なリーダーシップは見られず、多くのコミュニティメンバーたちが土地紛争とコミュニティ内外の軋轢に対応しうるリーダーシップを慣習的なリーダーたちに求めた動きが選挙というかたちで顕在化した。アダット長の直接選挙という民主的な選出手段にもかかわらず世襲的なアダット長が選ばれたことは、アダット長という地位の慣習的権威がリーダーの特権ではなくコミュニティメンバーの期待によって保持されたことを示唆する。同時に、選挙によるアダット長の交代は、前アダット長ら慣習的リーダーたちのこれまでの紛争処理能力に対する評価でもあった。他者からの承認を重視するリーダーシップ（前田 1991）のムダン人社会における実態は、リーダーは、個人の資質や特権よりも、長老たち複数のリーダーシップと調整する能力が求められていること、そしてリーダーシップは他のコミュニティメンバーの期待とその成果に対する評価に大きく支えられているものであったと言える。これまでインドネシアのアダットリーダー研究では外部への政治的能力や特権によって測られるリーダーシップの強弱が注目されてきたが、コミュニティ内部でのリーダーシップを合わせて検討することで、アダットリーダーに対する、リーダーシップを発揮する側とそれに追従する側であるコミュニティメンバーたちの期待や評価という双方向の働きかけによって成り立つというリーダーシップ概念の相互性を明らかにしたことが本研究の東南アジア農村研究およびボルネオ地域研究としての学問的貢献である。